症 例

上行結腸カルチノイド腫瘍の1例

藤沢市民病院外科

高橋 利通 笠岡 千孝 小林 俊介
田村 寿康 国崎 主税 大久保 賢治

消化管のカルチノイド腫瘍は本邦では直腸、胃や十二指腸に多くみられ、結腸には稀である。今回上行結腸にみられたカルチノイド腫瘍の1例を経験したので報告する。症例は60歳の女性。主訴は便潜血反応陽性。注腸造影、大腸内視鏡検査を行い、上行結腸に2型の腫瘍を認め、生検でカルチノイド腫瘍と診断した。1990年9月6日、右半結腸切除術を行った。上行結腸に大きさ 1.8×1.6 cm、2型、1/4周性の腫瘍を認め、病理組織所見では大きさのそろった腫瘍細胞が索状に配列し、カルチノイド腫瘍であった。深達度pm、リンパ節転移なし。術後経過は良好で術後3週間で退院となった。術後1年6カ月の現在、健在である。本邦報告44例を集計したが、結腸カルチノイドは進行した症例が多く、治療成績は不良であったが、転移のない22例の成績は良好で本症例のように比較的初期のものでは長期生存も十分に期待しうると思われた。

索引用語：上行結腸カルチノイド

はじめに

結腸のカルチノイド腫瘍は比較的稀である。われわれは上行結腸にみられたカルチノイド腫瘍の1例を経験したので報告する。

症 例

患者：60歳、女性。

主訴：便潜血反応陽性。

既往歴：特になし。

現病歴：1990年7月、健診で便潜血反応陽性を指摘され、当院外来を受診した。

現症：栄養良好。貧血なし。腹部には腫瘤触知せず。腹水なし。肝触知せず。

臨床検査所見：末梢血液像、血液生化学検査、尿検査に異常所見なく、血清CEA値は 2.5ng/ml (EIA)であった。

注腸造影：上行結腸に 1.8×1.6 cmの2型の腫瘍を認めた(図1)。

大腸内視鏡検査：上行結腸に2型の腫瘍を認め、易出血性であった。

生検所見：大きさのそろった腫瘍細胞が索状に配列し、カルチノイド腫瘍と診断した。1990年9月6日手

図1 注腸造影：上行結腸に2型の腫瘍を認める。

術を行った。

手術所見：上行結腸に腫瘍を触知し、右半結腸切除術を行った。P₀H₀N₀S₁, stage II(大腸癌取扱い規約)

1992年5月12日受付 1993年2月10日採用

図2 切除標本：上行結腸に2型の腫瘍を認める。

図3 切除標本の組織所見 (H.E. ×40)：カルチノイド腫瘍で深達度は筋層である。

R₃治療切除であった。

切除標本：上行結腸の肝彎曲寄りに1.8×1.6cmの2型の腫瘍を認めた(図2)。

病理組織所見：大きさのそろった腫瘍細胞が索状、胞巣状のclusterを形成し、カルチノイド腫瘍であった(図3)。深達度は固有筋層にとどまり、リンパ節転移は認めなかった。

術後経過：良好で術後3週間で退院となった。術後1年6カ月の現在、再発を認めていない。

考 察

カルチノイドは1904年 Oberndorfer¹⁾により通常の癌に比べて浸潤性が少なく比較的良好な経過を示す小腸腫瘍として名づけられた。Sanders ら²⁾は消化管カルチノイド3,633例中、大腸には2,409例がみられたと報告している。そのうち虫垂に1,609例(66.8%)、直腸に706例(29.3%)、結腸に94例(3.9%)認められている。

本邦では結腸のカルチノイドは1986年曾我³⁾が33

表1 結腸カルチノイドの本邦報告例

結腸カルチノイド (文献報告44例)	
盲 腸	7
上行結腸	17
横行結腸	9
下行結腸	1
S状結腸	8
多 発 性	2
計	44

例、1990年今分ら⁴⁾が40例集計しており、1991年までに44例が報告されている(表1)。その平均年齢は55.2歳と中年以降に多く、男性23例、女性16例と男性に多い。曾我⁵⁾によれば結腸のカルチノイドの症状として腹痛が最も多く、次に、下痢、腹部腫瘤触知の順となっている。結腸では部位の特異性として直腸や虫垂に比べ、ある程度大きくならないと症状が発現しにくいとしている。したがって結腸のカルチノイドは胃や直腸に比べ、大きくなってから発見されるのが特徴といえよう。その大きさは10cmを超えるのも10例あり、本症例のように2cm以下のものはわずかに7例にすぎない。

カルチノイドは肉眼では粘膜下腫瘍の形をとり、大きくなると2型の腫瘍になるという⁶⁾。ある程度大きくなると生検でカルチノイドと診断されることが多く、本症例も術前診断が可能であった。

また、曾我⁵⁾によれば結腸のカルチノイド33例のうち12例(36.4%)に転移を認めており、その内訳は肝臓10例、リンパ節8例、肺、腹膜、肝臓に各3例、副腎に2例である。したがって外科的治療は癌に準じて行われるべきであり、十分なリンパ節郭清を伴った根治手術が必要といわれている^{5)~8)}。比較的小さい1~2cmのものの転移率さえ25.7%におよんでいる。

最後に、結腸カルチノイドの成績は進行した症例が多く、肝臓やリンパ節に転移を認めた症例は不良であったが、転移のない22例の成績は良好であった。本症例のように比較的初期のものがみつければ根治手術も可能であり、長期生存も十分可能と思われた。

文 献

- 1) Oberndorfer S: Karzinoide Tumoren des Dünndarms. Frankfurt Z Path 1: 426—432, 1907
- 2) Sanders RJ: Carcinoids of the gastrointestinal tract. Surg Gynecol Obstet 119: 369—380, 1964
- 3) 曾我 淳：本邦 carcinoid 腫瘍—1342症例の統計

- 学的分析, 外科 48: 1397—1409, 1986
- 4) 今分 茂, 西村 正, 谷口英治他: 下行結腸カルチ
ノイドの1手術例, 日臨外医会誌 51: 358—363,
1990
- 5) 曾我 淳: 大腸カルチノイドの診断と治療, 癌と
化療 13: 2318—2324, 1986
- 6) 遠城寺宗知, 渡辺英伸: 消化管カルチノイドの病
理学, 胃と腸 10: 615—623, 1975
- 7) 高見 博, 阿部令彦: 消化管カルチノイド, 消外
5: 955—957, 1982
- 8) 笹野伸昭, 増田高行: 消化管カルチノイドー病理
組織, 外科 44: 1377—1382, 1982

A CASE REPORT OF CARCINOID TUMOR OF THE ASCENDING COLON

Toshimichi TAKAHASHI, Chitaka KASAOKA, Syunsuke KOBAYASHI, Toshiyasu TAMURA,
Chikara KUNISAKI and Kenji OHKUBO

Department of Surgery, Fujisawa City Municipal Hospital

Carcinoid tumor is commonly found in the rectum, stomach and duodenum, and rarely in the colon. Here a case of carcinoid of the ascending colon is described.

A 60-year-old woman was admitted to the hospital for further examination of positive fecal occult blood. Barium enema and colonofiberscopy revealed a polypoid lesion in the ascending colon. Biopsy showed Borrmann type 2 carcinoid tumor. Right hemicolectomy was carried out and a 1.8 × 1.6 cm tumor in the ascending colon was confirmed.

Postoperative course was uneventful and the patient was discharged on 3rd week after the operation. The patient is doing well eighteen months after the surgery.

Forty-four cases seen in the Japanese literature were analyzed. Carcinoids of the colon were commonly in an advanced stage and the therapeutic results were poor. However, 22 cases without metastasis were able to have good results and long-term survival can be expected, if the tumor is in a relatively early stage.